

撥さばき 単純な困難

私は、三味線が「良
く出来た不便な楽
器」だと思います。
一音一音、人格なら
ぬ「音格」を持つ
が、三味線の特異性
だと思えます。一音
鳴らし、消え入る中、
聴き手の思いが音楽
を完成させます。

イギリスの演出家
サイモン・マクバー

ニー氏の芝居のワークシヨッ
プに十数年にわたり参加しま
した。彼は、日本人の美意識
を、ほの暗い世界から攫取し、
芝居を織り上げます。旋律も
自然に紡ぎ出されるのです。
「歩く」という基本的なこと
が、何と難しかったことか。
それは、三味線を弾く「撥」



本條秀太郎

③ 下ろすという
単純な作業の
困難さに通じ
ます。

空気や湿度、不便さ
も生活に取り込んで来た日本人
の生き方自体が舞台装置。
「光と陰」、衣擦れの音、空
気感さえも逃さずに表現しま
す。

2008年、マクバーニー
氏演出で、谷崎潤一郎の『春
琴抄』や『陰翳礼讃』の世界
を舞台化した「春琴」。今年
7月のニューヨーク、8月の
東京・世田谷パブリックシア
ターなどで再演されます。現
代の日本人に「日本」を取り
戻させてくれる舞台です。マ
クバーニー氏の日本に対する
憧憬、そして警鐘を、初演時
に私が作曲した三味線音楽で
伝えていきたいと思えます。

(三味線演奏家・作曲家)